

御堂筋 彫刻ストリート Map



大阪市計画調整局

「御堂筋彫刻ストリート」概要

大阪のメインストリートである御堂筋では、市民や国内外からの来訪者に親しまれるアメニティ豊かな芸術・文化軸として整備していくため、平成4年から「人間主体のまち、人間賛歌」をテーマに「人体」をモチーフとした彫刻の寄付を沿道企業から募って設置してきました。御堂筋の土佐堀通から長堀通までの約2kmにわたり、世界的にも一級品である彫刻が29体並んでいます。

「御堂筋彫刻ストリート」アクセス

 Osaka Metro御堂筋線・京阪電車京阪本線「淀屋橋」駅
Osaka Metro御堂筋線・中央線・四つ橋線「本町」駅 など

大阪市 計画調整局 計画部 都市計画課(都市景観)

TEL.06-6208-7854

<https://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/page/0000050399.html>



発行:令和7年3月



1 みどりのリズム “Rhythm of Green” 清水 多嘉示 Takashi Shimizu

手を組んでダンスをする2人の少女の一瞬のポーズを捉えている。往々にしてダイナミックになりすぎそうな題材を、清水多嘉示は、感情を抑え、厳格な構成による構築的手法で、軽快なリズムに満ちた彫刻に仕上げてみせた。それまでの近代日本彫刻が重要視しなかった構築的彫刻の代表作としても高く評価されている。



2 休息する女流彫刻家 “Femme sculpteur au repos” アントワヌ・ブールデル Antoine Bourdelle

アントワヌ・ブールデルは、力強く男性的なモニュメント性の強い作風で知られるが、この作品のような叙情あふれる女性像も数多く手がけている。モデルは、当時の彼の助手で、後に妻となったクレオパートルであり、彼の彼女に対する暖かな視線が作品のいたる所から感じとれる。



3 座る婦人像 “Donna Seduta” エミリオ・グレコ Emilio Greco

エミリオ・グレコは、現代イタリア具象彫刻界の代表的な巨匠である。作品の形態上の特徴は、独特のポーズにある。この作品は彼の主要なテーマである「座る像」シリーズ中の1点であるが、一見不自然とも思われるポーズをとることによって、緊張感と生命力を与えることに成功している。



4 姉妹 “Sisters” 中村 晋也 Shinya Nakamura

中村晋也は、このような古典的様式の女性像を得意とする作家である。すぐ後ろにいる妹に優しい視線を投げかける姉と、姉に頼るように身を寄せる妹。身体バランスも肉付きも酷似した2人の裸婦が寄り添い、親密で暖かな雰囲気醸し出す。姉妹の心の絆の強さが伝わってくるような作品である。



5 みちのく “Michinoku” 高村 光太郎 Kotaro Takamura

高村光太郎の晩年の代表作である。十和田湖の自然の偉大さ、深遠さを表現した彫刻であるとともに、彼の心の中に生きていた妻・智恵子の残像を具現した裸婦像でもある。2人の女性からなるこの作品は、よく見ると全く同一の裸婦像を向い合せに置くという極めて異例の構成となっている。



6 陽光(ひかり)の中で “In The Sunshine” 佐藤 敬助 Keisuke Sato

人は心満たされるとき、豊かな暖かさを醸し出すと同時に、私たちに安らぎを与えてくれるという佐藤敬助の思いが表現された作品である。



7 ジル “Jill” 朝倉 響子 Kyoko Asakura

日本に数少ない第一線で活躍する女性彫刻家である朝倉響子がつくりあげる、日常生活の中のワンシーンをみるかのような現代的で都会的に洗練された女性像である。この作品は、朝倉芸術の大きな魅力である、今日に生きる女性のあるがままの姿が美しく、かつ格調高く表現されている、ファッショナブルでエレガントな女性像である。



8 火の王No.1 “Fire King No.1” フィリップ・キング Phillip King

フィリップ・キングは、イギリス現代彫刻の代表的作家の1人である。彼の作品の大きな特徴は、まるで舞台劇のような雄弁で激情的な動きと構成にある。この作品でも、彼の持ち味が十分に発揮されている。量感のある幾何学的立体の使用、荒削りな材質感が、「火」という主題を明確にし、作品により一層の力強さと緊張感を与えている。



9 若い女 “Young Woman” 桜井 祐一 Yuichi Sakurai

はつらつとした、若く健康的な肢体から、初々しさとのかな色香が感じられる。Tシャツをお腹のあたりで持っているポーズがユニークで、オーソドックスなモチーフが魅力的なものになっている。桜井祐一の長年にわたる美への探究心が帰結した作品である。



10 腕を上げる大きな女 “Grande Femme Bras Leves” アントワヌ・ブールデル Antoine Bourdelle

丸太のような太い腕、球形に近い小さな頭部、円筒形のしっかりした首、そしてギリシャ式の壺形の堂々たる体躯、それらが絶妙のバランスの中で一体となって、この作品を構成する。腕を頭の上で組む以外は、身体にほとんど動きはない。アントワヌ・ブールデルにはめずらしい静的なポーズが、この女性像に更なる生命感を与えている。



11 渚 “The Beach” 淀井 敏夫 Toshio Yodoi

淀井敏夫は、昭和の具象彫刻界の大家の1人である。彼には、動物をモチーフにした作品が多く、それらは、まるでジャコメッティ彫刻のような繊細な構成によって、生き物の命のはかなさを感じさせる。この作品は、海辺の椅子でくつろぐ若い女性の姿を表したものであるが、彼ならではの叙情が漂っている。



12 道東の四季-春 “Four Seasons of East Hokkaido-Spring” 舟越 保武 Yasutake Funakoshi

北海道釧路市にある弊舞橋に設置されている4作家競作による「道東の四季」のうちの1点「春」のエスキースである。実際に釧路に設置されている像は薄衣をまとっているが、この作品は、裸体である。舟越保武は、清楚で優美な女性像を得意としており、無理のない自然体で立つ純潔な乙女の姿は、いかにも「春」というテーマにふさわしい。



13 プレンタのヴィーナス “Venere del Brenta” フランチェスコ・メッシーナ Francesco Messina

1947年の「アリーチェ」を基に、1987年に再制作された作品である。北イタリアを流れるプレント川で遊ぶ少女の姿をヴィーナスに見立てている。この作品がもつ平和で気負いのない雰囲気は、あまりに技量が目立ち、怖いほどの緊張感に満ちた1940年前後のフランチェスコ・メッシーナの作品には見られなかったものであり、老境の味わい深い作品である。



14 ヴェールを持つヴィーナス “Venus au voiles” オーギュスト・ルノワール Auguste Renoir

印象派の巨匠オーギュスト・ルノワールの豊満な裸婦を描いた晩年の絵画からそのまま抜け出してきたような作品である。1912年に疾病してからは、絵筆を持つものも不自由となり、彼のデッサンを忠実に三次元に置換えたリシャール・ギノーの協力を得て、以前にも増して積極的に彫刻に取組むようになった。この作品は、その時期の制作である。



15 少年と少女 “Boy and Girl” リン・チャドウィック Lynn Chadwick

鋭い線と面で構成された個性的で大胆なフォルム。足らしきものの存在から、かろうじて人物と判る。荒削りの仕上げが、少年と少女の素朴で純真な印象を表現しているかのようだ。具象でも抽象でもあるユニークな造作が、リン・チャドウィックの特徴であり、現代彫刻界でも特異かつ重要な存在である。

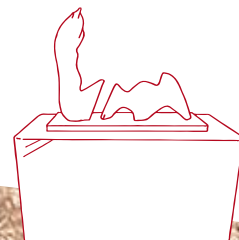


どっちが少年でどっちが少女？

Column 1

彫刻の表面の仕上げ

彫刻は、まず原型を作り、それを鋳造し、最後に表面の加工や着色などの仕上げを行い完成します。御堂筋彫刻ストリートで設置されている作品は「ブロンズ像」と言われるもので、鋳造されたままの状態では10円玉のような銅の色をしています。作家の思う色や質感になるように仕上げがなされているので、よく見るとどれも色が異なります。また、表面が滑らかなものや、ざらざらしたものなど様々です。それぞれの作家のこだわりポイントをじっくりご覧ください。



彫刻を彩る「コンテナガーデン」

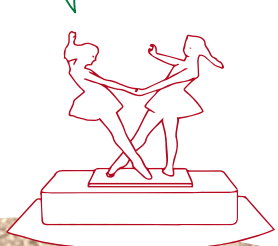
彫刻を設置している台座は1つ1つ、彫刻の大きさによってサイズが異なり、作品がちょうど見やすい位置になるように作品とのバランスを考えて製作したものです。そして、その両脇にある「コンテナガーデン」の草花も彫刻に合わせてデザインしています。コンテナガーデンの設置は大阪市が行っていますが、季節に合わせた植え替えや、水やりなどの日常管理は御堂筋の沿道企業で構成されたエリアマネジメント団体である一般社団法人 御堂筋まちづくりネットワークが行っています。ぜひ彫刻とともに、お楽しみください。



どれも本物

彫刻は鑄造するため、1つの原型から何体も作ることができます。何体までオリジナルとするかは作者が決めることができますが、完成時にすべて鑄造するわけではありません。注文が入ると鑄造する場合もあるため、没故作家であっても原型が残っていれば作者が決めていた体数までオリジナルとして鑄造できます。サインの横などに「2／6」とあれば、6体鑄造できるうちの2体目ということを表しており、どれもオリジナル(本物)という扱いになります。もちろん、御堂筋にあるのはどれもオリジナルです。作家によってナンバーやサインを書いていないこともあります。彫刻を見るときに探してみてください。

「みどりのリズム」は清水多嘉示の代表作で、全国に設置されています。



16 ダンサー “Dancer” ヴェナンツォ・クロチェッティ Venanzo Crocetti

胸の前で腕を組み、静かにたたずむ若い踊り子。うっすらと微笑を浮かべた口もと、横を向いて何かを見つめる優しい眼差し、細く伸びた足。この作品には、叙情がみずみずしく漂っている。ヴェナンツォ・クロチェッティは、現代イタリアを代表する具象彫刻の大家であり、「踊り子」シリーズは、彼が長年にわたって制作し続けるテーマでもある。



17 ボジョレーの娘 “Girl in Beaujolais” 富永 直樹 Naoki Tominaga

ワインで有名なボジョレー地方の若い女性を、頭にブドウを載せたさっそうとした姿で表現している。この作品は、華やかで親しみやすい作風で知られた富永直樹の特色のよく表れた晩年の小品である。



18 水浴者 “Bagnante” マルチェロ・マスケリーニ Marcello Mascherini

すらりと伸びた脚、布の線の動きによって暗示される両腕、はちきれそうな胸、愛くるしい顔。水浴を終え、水から上がったばかりの少女の一瞬のすがすがしい姿態が見事にとらえられている。作品の骨格が基礎的な立体で構成されているにもかかわらず、具象的な印象を与えるのは、マルチェロ・マスケリーニのロマンティストとしての資質ゆえであろう。



19 ヘクトルとアンドロマケ “Ettore e Andromaca” ジョルジオ・デ・キリコ Giorgio de Chirico

ジョルジオ・デ・キリコは、形而上絵画の創始者で、後のシュールレアリスム運動にも大きな影響を与えた。彼の作品を貫くのは、卵型の頭、紡錘形の脚、螺旋になった腕をもった人体である。この作品も、そのような彼のスタイルが表れた作品であり、主題であるギリシャ神話も、ギリシャに生れ育った彼が得意とした題材である。



20 啓示 “Revelation” 日高 正法 Seiho Hidaka

この作品は、天から落ちてくる「神の声」と、それを受けとめる人間を表現しており、作品では、直線と曲線、鋭角と穏やかなカーブ、天を指す手と地に向かう紡錘形の物体、密と粗など、背反する要素の組合せによって、人間を超える不可視な存在を暗喻し、「神の啓示」という宗教的なテーマを見事に具現している。



21 大空に “Paeon to The Nature” 桑原 巨守 Hiromori Kuwahara

流れるような体の動きが美しく、見る者の視線は、自然に空へと向けられる。高く上げた少女の手には、今にも飛び立ちそうな鳩がいて、その手の先に希望が見えるようである。



22 イヴ “Eve” オーギュスト・ロダン Auguste Rodin

オーギュスト・ロダンは、「考える人」「カレーの市民」「バルザック」「地獄の門」などの彫刻で知られる近代彫刻の父である。この作品は、彼の最も充実した創作活動時期のもので、その身をよじるポーズといい、量感ある肉付けといい、いかにも彼らしい骨太で存在感のある力作である。



23 踊り子 “Ballerina” フェルナンド・ボテロ Fernando Botero

モナ・リザも、アダムとイヴも、精悍な騎士も、フェルナンド・ボテロが描くと、太っちょのまんまに変身してしまう。戦後の具象画家の中でも彼ほど際立ったスタイルをもつ美術家は珍しい。この作品は、他の彫刻家の裸婦像よりも肉付きがよく、ユーモラスで温かい。まさに彼の絵画の延長線上の造形である。



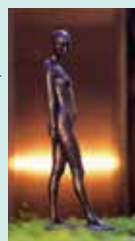
24 女のトルソ “Torse de Femme” オシップ・ザツキン Ossip Zadkine

力強く簡潔な線とヴォリューム感。この「女のトルソ」は、平面的集まりとして再構築されたキュビズムの特徴を示しつつも、厳格なフォルムから解放された自由な表現がみられる。抽象と人間の内面表現を融合させたザツキンの特色がよく現れた、彼の最盛期の作品である。



25 布 “Cloth” 佐藤 忠良 Churyo Sato

さりげない仕草でスッと立つ裸婦。左手に持った布が絶妙のアクセントになっている。この作品は、佐藤忠良の比較的近いものであるが、彼の到達した円熟したスタイルがよく表れた秀作である。動きも肉付けも極端に抑制され作品には、静かで確かな存在感と豊かな詩情が漂い、見る者にさわやかな印象を与える。



26 レイ “Rei” 佐藤 忠良 Churyo Sato

佐藤忠良は、現代女性の身体の線やプロポーションの美しさを自然なポーズの中に漂わせた作品で知られ、わが国具象彫刻界の代表的な作家である。この作品も、「モデルの素朴で健康な姿態にひかれ、この身体にことさらの演技的ポーズをさせずに彫刻してみたかった」と彼自身が語るように、人間の自然な身体をみずみずしく表現している。



27 アコーディオン弾き “L'accordeniste” オシップ・ザツキン Ossip Zadkin

オシップ・ザツキンは、ロシア出身で主にフランスで活躍したキュビズムの彫刻家であり、アフリカなどの土着美術に影響を受けた。この作品は、1924年に制作された同名の彫刻を1962年にリメイクしたものであり、自己の造形を生み出そうとして模索していた時期の前作に対し、穏やかで物静かな雰囲気を漂わせている。



28 髪をとく娘 “Young girl combing her hair” バルタサル・ロボ Baltasar Lobo

太い縄のような豊かな髪、豊満な肉体が目をはひく大胆な作品であり、原始彫刻とキュビズムが融合して発展したものである。空を見上げてゆったりと髪をとく姿は、穏やかで温かな印象を受け、バルタサル・ロボの理想である女性の豊満で優美な部分が象徴化されている。



29 二つに分断された人体 “Working Model for Two Piece Reclining Figure” ヘンリー・ムーア Henry Moore

イギリスが誇る巨匠ヘンリー・ムーアは、20世紀を代表する彫刻家の1人である。彼の作品を抽象と呼ぶか具象と見るかはさておき、彼が執拗にこだわり続けた主題が、「横たわる人体」を始めとする具体的なものであったのは確かである。この作品も、一連の人体像の1つであり、単純化された凸面と凹面の構成によって格調高いハーモニーを奏でている。



彫刻作家の関係

彫刻ストリートには国内外の様々な作家の彫刻が並んでいますが、実は作家同士に意外な関係があります。少しだけ紹介します。「イブ」は、ロダンが弟子のブールデルに、石膏原型に基づく石像を制作させ、その石像を基に鑄造されました。「休息する女流彫刻家」「腕を上げる大きな女」の作者であるブールデルは、ロダンの工房作品に多くかかわっている作家です。2体とも、当時のブールデルの助手で後に結婚する、クレオパートルをモデルに制作した作品です。また、「みどりのリズム」の作者である清水多嘉示は、ブールデルの弟子です。「レイ」「布」の作者である佐藤忠良は、「道東の四季・春」の作者である舟越保武と大学時代に知り合い、生涯の友でありライバルであったそうです。

モデルは同じ女性
アントワーン・ブールデル 作

